

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 20 日現在

機関番号：34524
 研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2010～2011
 課題番号：22792239
 研究課題名（和文） 注意欠陥多動性障害児の行動特徴とマターナルアタッチメントとの関連性
 研究課題名（英文） Relationship between characteristic behaviors of children with ADHD and maternal attachment
 研究代表者
 真野 祥子（MANO SHOKO）
 兵庫大学・健康科学部・講師
 研究者番号：90347625

研究成果の概要（和文）：

ADHD 児の行動特徴とマターナルアタッチメントとの関連を検討するため、マターナルアタッチメント尺度を作成し質問紙調査を実施した。ADHD と診断された学童の母親を対象とし、マターナルアタッチメント尺度（現実・理想）、対児感情尺度、ADHD RS-IV、反抗挑戦性評価尺度、行為障害症状の程度についての質問紙回答を得た。分析の結果、ADHD 児の行動特徴は母親のネガティブな感情と関連し、行為障害傾向の高い行動特徴が子どもに対する愛着感と関連していることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study was to develop a scale to assess maternal attachment of mothers of children with ADHD and to examine the relationship between characteristic behaviors of children with ADHD and maternal attachment. The subjects were mothers of children with ADHD. The following scales; ADHD-Rating scale IV, Oppositional defiant disorder (ODD) scale, Conduct disorder scale, Hanazawa's scale of emotions toward children and Maternal Attachment scale for children with ADHD (reality・ideals) were filled out by mothers. We speculated that characteristic behaviors of children with ADHD was related to the mothers' affection (Avoidance) toward children and the conduct disorder was related to the maternal attachment.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：小児看護学、注意欠陥多動性障害

Hyperactivity Disorder:以下、ADHD と記述) 児の母親は、子どもの問題行動を制止しようと厳しくしつけようとする。しかし、この抑圧的な養育態度の積み重ねが親子関係の悪化、子どもの自己肯定感の低下、反抗挑戦性障害 (ODD) や行為障害 (CD) などの併存障害の合併を招き、さらに悪循環が生じる (田中, 1995)。

筆者の研究結果から、ADHD 児の母親は、児の行動特徴が顕著なほど、子どもに対する愛着 (Maternal Attachment: 以下、マターナルアタッチメントと記述) が減少し、その結果、否定的で厳格な養育態度となることが示された。ADHD 児の母親の養育態度が厳格となる背景に、子どもの行動特徴がマターナルアタッチメント形成を妨げていることが疑われた。マターナルアタッチメントの問題は、虐待との関連が指摘されているが、実際、ADHD 児は虐待を受けるリスクが高い (Daley, 2003)。よって、母親の養育支援に取り組むことが必要で、そのためには ADHD 児の行動特徴とマターナルアタッチメントがどのように関連しているのかを明らかにしなければならない。

そこで今回の研究では、ADHD 児の母親に特化したマターナルアタッチメント尺度を作成し、ADHD 児特有の行動全般を把握し、子どもの行動特徴とマターナルアタッチメントとの関係を明らかにし、マターナルアタッチメント形成促進のための援助のあり方を検討することを目的とする。

2. 研究の目的

(1) ADHD 児の母親に特化したマターナルアタッチメント尺度を作成する。

(2) ADHD 児特有の行動全般を把握し、作成したマターナルアタッチメント尺度を用いて、ADHD 児の行動特徴とマターナルアタッチメントとの関係を検討する。

(3) 上記 (2) の結果をもとに、マターナルアタッチメント形成促進のための援助のあり方について検討する。

3. 研究の方法

(1) マターナルアタッチメント尺度の作成
マターナルアタッチメント尺度として既に信頼性・妥当性が確認されている、Maternal Attachment Inventory (Muller, 1994)、日本版 MAI (太田, 2001; 中島, 2001)、母親の子どもに対する愛着 (大日向, 1982) などを参考に、聞き取り調査や筆者のこれまでの研究で得た ADHD 児の母親の特徴を加味し、学童期の ADHD 児の母親に特化したマ

ターナルアタッチメント尺度の質問項目を作成した。

次に、尺度全体と各項目が概念に属するか、発達障害児の家族関係の専門家に評価を依頼し内容的妥当性を検討した。専門家と ADHD 児を持つ母親に、各項目について明瞭/不明瞭のいずれかを選択してもらい、表面的妥当性を検討した。

プレテストとして実施した調査データから、各項目の平均、標準偏差、最大値、最小値、歪度、尖度、分布を確認し、被験者の反応から回答がスムーズに行えるかを検討し、最終的な尺度項目を決定した。

これまでの研究で、ADHD 児の母親は、子どもに対して愛着を持ちたいが、育てにくさに影響されて理想通りに持てないでいる傾向にあることが考えられたため、「現状」と「理想」の2パターンを作成した。

(2) 本調査

①被験者: 医師により DSM-IV-TR に従って ADHD と診断された学童の母親とした。対照群は、子どもの年齢、児の兄弟姉妹の数、母親の属性が類似した通常学級児の母親とした。

②調査項目

- 1) マターナルアタッチメント尺度: 母親から子どもへの愛着の程度を測定する。「現状」と「理想」の2パターンを用いる。
- 2) 対児感情尺度 (花沢, 1996): 子どもに対して抱く感情 (接近、回避) の程度を測定する。
- 3) ADHD 児の行動評価:
 - a. ADHD Rating Scale (RS)-IV 日本語版 (山崎, 2003): ADHD の診断型 (多動性、衝動性、不注意) とその重症度を測定する。
 - b. 反抗挑戦性評価尺度 (ODS) (原田, 2002): 感情制御、反抗性、挑戦性の重症度を測定する。
 - c. 行為障害 (CD) 評価尺度: 診断基準をもとに作成し、行為障害の重症度を測定する。

③統計解析

2群のマターナルアタッチメント尺度 (現状・理想)、対児感情尺度 (接近・回避)、ADHD RS-IV 日本語版、ODS、CD 評価尺度ごとの比較には、対応のない t 検定を用いた。マターナルアタッチメント (現状・理想)、対児感情 (接近・回避)、行動特徴 (不注意、多動/衝動、反抗挑戦性、行為障害傾向) との関連は、Pearson の積率相関係数を求めた。

4. 研究成果

(1) 属性

ADHD 児の母親 68 名 (男児:60 名、女児:8 名、平均年齢 9.5 ± 1.8 歳) から質問紙の回答を得ることができた。対照群は通常学級でサンプリングされた児童の母親 60 名とした。

(2) 2 群の変数ごとの平均値の比較 (表 1)

ADHD 群と対照群の各変数の平均値を表 1 に示した。対児感情(接近)、マターナルアタッチメント(現実)については、ADHD 群と比較して対照群の方が有意に得点が高かった。子どもに対するポジティブな感情は、ADHD 群より対照群の方が有意に高いことが示された。

一方、対児感情(回避)については、対照群と比較して ADHD 群の方が有意に高かった。ADHD 児の母親の方が子どもに対してネガティブな感情を抱いていることが考えられる。

マターナルアタッチメント(理想)については、両群間で有意な差を認めなかった。

行動面に関しては、不注意、多動/衝動性、ODS、CD のすべての項目において、ADHD 群の方が有意に得点が高かった。このことから、ADHD 児の母親の方が行動面での問題を多く抱えていることが考えられる。

表 1 2 群の変数ごとの平均値

	ADHD	対照	p-value
接近	21.0±8.0	26.2±7.2	0.001
回避	14.9±6.1	9.7±5.7	0.001
現実	137.7±19.0	147.0±13.1	0.004
理想	157.9±15.9	159.4±13.9	0.606
不注意	15.8±6.4	7.5±7.0	0.001
多/衝動	10.1±6.5	4.7±6.1	0.001
ODS	34.7±18.1	15.6±14.1	0.001
CD	1.1±2.1	0.1±0.4	0.002

(3) 対児感情(接近・回避)と行動特徴との関連

対児感情(接近)と行動特徴(不注意、多動/衝動性、ODS、CD)間の Pearson の積率相関係数を求めた。結果は、対児感情(接近)と CD 間は、ADHD 群は $r = -0.41$ ($p < 0.01$)、対照群では $r = -0.30$ ($p < 0.05$) であり、両群とも有意な相関を認めた。2 群において、子どもに対するポジティブな感情は、行為障害傾向と関連していることが考えられる。

対児感情(回避)と行動特徴(不注意、多動/衝動性、ODS、CD)間の Pearson の積率相関係数を求めた。結果は、対児感情(回避)と不注意間は、ADHD 群は $r = 0.38$ (p

< 0.01)、対照群では $r = 0.49$ ($p < 0.01$) であり、両群とも有意な相関を認めた。対児感情(回避)と多動/衝動性は、ADHD 群は $r = 0.45$ ($p < 0.01$)、対照群では $r = 0.38$ ($p < 0.01$) であり、両群とも有意な相関を認めた。対児感情(回避)と ODS 間は、ADHD 群は $r = 0.40$ ($p < 0.01$)、対照群では $r = 0.42$ ($p < 0.01$) であり、両群とも有意な相関を認めた。対児感情(回避)と CD 間は、ADHD 群は $r = 0.26$ ($p < 0.05$)、対照群では $r = 0.33$ ($p < 0.05$) であり、両群とも有意な相関を認めた。2 群において、不注意や多動/衝動性を伴う ADHD の行動特徴や反抗挑戦性の高い行動、行為障害傾向の高い行動特徴は、子どもに対する母親のネガティブな感情と関連していることが考えられる。

(4) マターナルアタッチメント(現実)と行動特徴との関連

マターナルアタッチメント(現実)と CD 間は、ADHD 群では有意な関連を認めた ($r = -0.34$, $p < 0.01$) が、対照群では有意な関連を認めなかった ($r = -0.21$, $p = 0.17$)。ADHD 児の母親の子どもに対する愛着感は、行為障害傾向の高い行動特徴と関連していることが考えられる。

(5) 支援のあり方

ADHD 児を持つ母親の支援のあり方について考える。本研究の結果から、ADHD 児に特徴的な行動は、母親の子どもに対するネガティブな感情を生起させてしまうことが考えられる。育てにくい行動特徴を持つ子どもに対する愛着形成の困難さが推察できる。そこで、母親のネガティブな感情を生起してしまう子どもの問題行動出現を防ぐために、子どもの行動改善を図ることが有効であろう。具体的には、子どもに対する SST (Social Skills Training: 生活技能訓練) などである。また、母親に対してはペアレントトレーニングなどを実践し、母親の養育スキルを向上させることで問題行動の出現を防ぐことも必要であろう。

本研究の結果から、行為障害傾向の高い行動特徴と母親の子どもに対する愛着感との間に有意な関連を認めた。行為障害は、ADHD の二次的な障害とも言われている。よって、二次障害に進展しないよう未然に防ぐ必要がある。早期からの良質な養育は併存障害の合併を防ぐ(Chronis, 2007) といわれていることから、母親の養育支援は重要になってくる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計2件)

1. Shoko Mano, Hiroyuki Uno, Yushiro Yamashita, Toyojiro Matsuishi. Effects of Summer Treatment Program for children with ADHD on mothers' affection toward children. 9th European Pediatric Neurology Society Congress, 2011. (Croatia)

2. Shoko Mano, Hiroyuki Uno, Tomomi Ikeda, Azusa Kawakami. Maternal Attachment in the mothers of children with ADHD. The 1st Global Congress for Consensus in Pediatrics & Child Health, 2011. (Paris)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

真野 祥子 (MANO SHOKO)

兵庫大学・健康科学部・看護学科・講師

研究者番号：90347625

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし